
真面目は可愛い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真面目は可愛い

【Nコード】

N9619M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

一人称が僕の少女唯は真面目な女の子。その彼女と比呂の恋愛はというと。二人のモデルは仮面ライダーカブトの主人公の兄妹です。

第一章

真面目は可愛い

佐藤唯は一人称が変わっている。

自分を『僕』というのだ。これが大きな特徴だった。

黒髪を肩まで伸ばしそれを濡らした様子に首に添わせている。目は大きく黒い部分が多い。やや吊り目である。厚い唇で全体的に細い身体をしている。

学校にいる時以外は常にズボンである。そんな彼女だが性格はというと。

「だからそれは駄目だよ」

「えっ、駄目なの？」

「うん、駄目だ」

その完全に男の子の口調での言葉である。

「校則にないからな。駄目だよ」

「ちえっ、唯ちゃんは厳しいわね」

「全く」

「僕が厳しいんじゃない」

彼女が言うにはそうである。

「校則にあるからだ。だから守らないといけないんだ」

「そういう考えが厳しいっていうのよ」

「ねえ」

「全く」

友人達はまるで軍隊の憲兵の如く規律に五月蠅い唯に閉口するのが常だった。見れば彼女の左手には風紀委員の腕章がある。これもまた憲兵のそれに見える。

その憲兵の様な彼女と同じ風紀委員なのが青道比呂である。背は高く肌はやや浅黒い。癖のある黒髪に強い光を放つ目、それと厚く小さい唇の顔は彫もあり何処か日本人離れしている。彼もまた風紀

委員だ。

しかし比呂はというとだ。特に口煩くもない。その彼の言葉はだ。
「最低限の校則を守っていればいいじゃないか」

こう言うのである。彼はだ。

「別にそれで世の中が変わるわけじゃない」

「いや、それは違う」

そしてそれにいつも反論するのが唯だった。

「皆が規則を完璧に守らないと世の中は乱れるんだ」

「世の中って学校だけじゃなくか」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「だから規則は守らないといけないんだ。何でも完璧にだ」

「厳しいな」

その唯に対する比呂のコメントである。

「またそれは」

「厳しくしないと駄目だ」

まさに憲兵の言葉である。

「人は規律を守らないといけないんだ」

「規律規律と言うがだ」

そして比呂もその唯の反論する。

「あまりそう五月蠅くても駄目じゃないか」

「駄目だというのか？」

「そうだ。人には息抜きも必要なんだ」

比呂の言葉は誰もが思うことだった。

「そんな軍隊みたいなことはだ」

「あれ位でないと駄目だ」

しかし唯はまだ言うのだった。

「かつての日本軍の様に厳格でないとだ」

「時代が変わったんだが」

「時代が変わっても変わらないものもある」

この辺り実に頑固である。

「誠は変わらない、絶対にだ」

「真面目だな」

素直な賞賛の言葉ではある。

「唯は本当に」

「真面目で悪いか」

「悪いとは言っていない」

比呂もそれは否定しない。ありのままの言葉である。

「それはだ」

「じゃあいいじゃないか」

「しかしだ」

だがここでまた言う比呂だった。

「また随分と堅苦しいな」

「堅苦しいか？」

「そうだ、堅苦しい」

唯本人への言葉だ。

「随分とだ」

「しかしそれでもいいんだな」

「御前は自分が好きか？」

比呂は今度は唯に顔を向けて問うてきた。

第二章

「それはどうだ？」

「嫌いじゃない」

唯は比呂の目を向けて答えた。

「僕は僕だ。もっと努力が必要だと思っているが僕は僕だ」

「ならそれでいい」

そんな彼女の言葉を受けての返答だった。

「御前がそれでいいのならな」

「そうか」

「では行くぞ」

その唯に顔を向けての言葉だった。

「今からな」

「風紀委員の会議だったな」

「時間厳守だ」

唯は生真面目に話した。

「いいな、絶対にだ」

「わかってている。それではだ」

「行くぞ」

今度は唯からの言葉だった。何はともあれ彼等は会議に向かった。こんな二人の日常だった。

とにかく唯は厳しい。それは変わらない。風紀委員としてクラス
の憲兵そのものだった。

何かあるとだ。生真面目に皆に言うのだ。

「掃除は部屋の隅までだ」

「うわ、また言うし」

「本当に厳しいんだから」

皆はそんな彼女の言葉に閉口していた。

「ちゃんとお掃除してるのに」

「それでも真面目よ」

「真面目なら徹底することだ」

これが唯の返答だった。

「何もかもだ」

「徹底って」

「真面目に徹底もあるの」

「ある」

またしても断言だった。

「何もかも極めてだ。いいな」

「はいはい、わかったから」

「極めるわよ、じゃあ」

「とにかくお掃除をね」

皆彼女のその言葉に従いだった。部屋の隅から隅まで掃除をしていく。彼女は何処までも真面目だった。とにかく真面目から離れることはなかった。

それはいつもだった。何があっても外れることはない。服装はもとさらだった。

「スカートは短くしない」

「えっ、やっぱり校則!？」

「それ!？」

「足を見せたらはしたない」

クラスの皆は最近の流行でスカートを短くしている。通っている高校のスカートは元々短いのだが皆それを折ってさらに短くしているのだ。それが流行なのである。

しかしだ。唯はそれに対しても言うのである。

「だからだ」

「それでスカートは短く」

「それなの」

「そっだ、僕だっただ」

見ればスカートは普通の丈だ。足は見せているが皆程度ではない。

しつかりとしている。そして上着もボタンは全部しつかりしめていてネクタイもきちんとしている。それどころか制服はアイロンを糊を効かせてかけていてそのうえ埃さえ落としている。本当に真面目な格好である。

その格好でだ。彼女は言うのだった。

「スカートは普通になっている。皆もそうしてくれ」

「ソックスまで完璧だし」

「しかも靴は磨かれて」

「本当に軍人さんみたいね」

皆その彼女の格好を見ながらあらためて言う。

「けれどこれ位はいいじゃない」

「そうよ、これ位は」

「別にね」

それはいいというのだ。そして唯にさらに話す。

第三章

「スカートも校則にあるけれど」

「先生だつて何も言わないし」

「許容範囲で」

「駄目だ」

何と先生より厳しい。しかも風紀担当のだ。

「駄目だ、校則は校則だ」

「うわ、出た」

「校則は校則」

「その言葉を出すのね」

皆またしても閉口することになった。唯のその厳しさにだ。

そして唯はだ。さらに言ってきたのである。

「とにかくスカートは元に戻すことだ」

「どうしても？」

「この位とかはなくて？」

「そうだ、絶対にだ」

有無を言わせない口調だった。

「わかったな。それでだ」

「わかったわよ」

「なおすから、今すぐ」

彼女達もここまで言われると頷くしかなかった。まさに根負けだった。

そしてスカートをなおす。ベルトのところに手をやって折っているそのスカートをなおしていく。そのうえでまた言うのだった。

「これでいいのよね」

「それで」

「ネクタイもだ」

唯はそこも見ていた。一つを見ているわけではなかった。

「しっかりと締めてだ」

「何か本当に軍隊みたい」

「まさに鬼教官ね」

「全く」

皆そんな彼女に閉口するばかりだった。しかしである。

比呂はそんな彼女といつも一緒だった。ただし彼は風紀委員としては何も言わない。彼は必要なことをしていればそれでいいという考えなのだ。

その彼女の隣にいつもいる。彼女もその彼に顔を向けて問う。

「何でだ？」

「何でとは何だ？」

「君は何で僕のところにいるんだ？」

こう問うのだった。

「それはどうしてなんだ？」

「興味があるからだ」

だからだと返す比呂だった。

「それでは駄目か」

「いや、いい」

唯はこう彼に返した。

「君がそうしたいというのならな。校則では不順異性交遊は禁止だ
がな」

「安心しろ。俺もそれは言わない」

それはだというのだ。

「絶対にだ」

「絶対にか」

「御前がそれをしたくないのはわかっているからだ」
だからだというのだ。

「それだからな」

「だといいがな。しかしだ」

「今度は何だ？」

「こうしていつも一緒にいるとだ」

今度は比呂にこう言ってきたのである。

「疑われる」

「それを気にしているのか」

「李下に冠を正す」

昔からよく言われている言葉である。

「だからだ」

「相変わらず真面目だな」

「悪いかな？」

「そうは言っていない」

比呂はいつもの調子で返した。

「それはだ」

「そうか」

「むしろだ」

そしてであった。ここで比呂はこう彼女に言っのだった。その言葉は。

「いいと思う」

「いいのか」

「俺はいいと思っている」

こう告げるのである。

第四章

「それでだ」

「そう言われたのははじめてだ」

唯は少し気恥ずかしそうな声になっていた。表情は変わらないがそれでもだった。

「今まではとにかくな」

「堅苦しいとか窮屈とかか」

「わかるか」

「わかる、聞いているからな」

だからわかるというのだ。彼女がどう言われているのかをだ。

「しかし俺はそれでもだ」

「いいと思ってくれているんだな、僕を」

「そういう人間がいてもいい」

比呂はこの言葉を出しながら上を見上げた。

「この世に一人位はな」

「そういうものか」

「思うのは人それぞれにしてもだ」

「僕みたいな人間でもか」

「卑下することもない」

彼女のそれは打ち消した。

「卑下しても何にもなりはしない」

「しかし僕は実際に」

「少なくとも俺は御前のそうしたところはいいと思っている」

また言うのだった。唯にだけかけた言葉だった。

「だから一緒にいられる」

「そうか」

「こうして二人でいても」

「二人か」

「御前はそれでいいか？」

唯に顔を向けて問う。その背は一六〇ない。小柄というところではないがそれでも細身なので背丈よりもさらに細く見える。長身の比呂と比べるとかなりの低さだ。その彼女を見ながらの言葉だった。

「二人でいても」

「不純なことは嫌いだ」

ここでも生真面目さは見せる唯だった。

「しかし」

「しかしか」

「健全なのはいい」

それはというのだった。

「高校生ならそういうこともだ」

「いいというのだな」

「僕もだ」

一人称はこれでも、だった。

「女の子だ」

「それはわかっている」

「それなら。恋、いや」

この言葉は言ったすぐ側から打ち消した。頬を赤くさせて。

「何でもない。しかし」

「しかし？」

「君さえよかったら一緒にだ」

「こうしていてもか」

「頼む」

今度は願いの言葉になっていた。

「君さえよかったらだ」

「わかった。それではだ」

比呂は唯の言葉を受けてだ。静かに言葉を出してきた。

「俺も。御前さえよかったら」

「そうか」

「一緒にいてくれ」

こう告げた。

「一緒にだ」

「お互い思うことは一緒か」

「そうだな。一緒だな」

比呂は今は前を見ていた。顔を少し上げてそこにある青い空を見ながらの言葉だった。

青い空は白い雲もあった。それを見ながらの言葉だった。ただ青いだけではない。しかしそれでもそこにある青を見て話をしていた。

「ならそれでいいな」

「そうだな」

「真面目は悪くない」

比呂はまた言った。

「むしろだ」

「むしろか」

「いい。それではな」

「一緒に」

「歩いていこう」
こう話をして二人で歩いていくのだった。林の中の道にいるのは二人だ。林の葉は全て落ち下には枯れ葉が積もっている。しかし二人の心は今は寒くはなかった。むしろ温かいものだった。

第五章

二人が一緒にいるのを見てだ。皆は言うのだった。

「あの二人まさかと思うけれど」

「ああ、ひよっとしたらね」

「付き合ってる？」

「そうかも」

このことに何となくだが気付いたのである。

「けれどあの生真面目な唯が付き合うのかしら」

「そうよね。不純とか本当に言うしね」

「今時そんなこと言うかしら」

「言わないわよ」

それはないというのだった。そんなことを言うような時代でなくなつて久しい。

「そんなの。戦前の言葉じゃない」

「そうよね。言うのは唯だけ」

「じゃああれ？」

「まさかと思うけれど」

またこの言葉が出て来たうえで話される。

「真面目なお付き合いかしら」

「そうじゃないの？あの唯よ」

「実際に手すら握ってないとか」

「うわ、それはないわ」

この関係を予想して自分達で言う始末だった。

「今時それはね」

「そうそう。手すらって何よ」

「明治時代じゃないんだから」

拳句にはこんなことまで言われる。

「プラトニッククラブなんてね」

「絶対に流行らないし」

「けれど唯だからねえ」

「有り得るってどうか？」

「普通ね」

唯についてかなり正しい分析である。実際に彼女はそういう人間である。そこまでわかりやすい人間であるということでもあるのだ。
「まあそんな娘だからね。恋愛をしてもね」

「真面目なのね」

「本当にプラトニックなの」

「さて、どうなるかしら」

ここで彼女を見る。その横には比呂がいる。
しかしである。二人は実際に手すらつないでいない。しかし満足した顔をしている。

その二人を見てだ。皆また言う。見るのは唯である。

「それにしても」

「どうしたの？」

「唯もあれはあれで」

こう言う娘もいたのだ。

「可愛いわね」

「可愛いって？」

「唯が？」

「ええ、可愛くない？」

その彼女を見続けたの言葉だ。

「何か真面目でそれでいて」

「可愛い……そうね」

「そういえばね」

皆もここで気付いたのだった。

「それがかえって」

「いじらしいってどうか」

「そんな風に」

そういう可愛さであるというのだ。彼女のそれは。

「成程ねえ、そういう可愛さもあるのね」

「ただ堅苦しいだけじゃなくて」

「そういうところも含んでるんだ」

「だから青道君も」

その彼女の横にいる彼も見られた。

「一緒にいるんだ。そういうのがわかってるから」

「それでなの」

「中々わかりにくいけれどね」

「成程ね。そして青道君はそれがわかっていた」

「かなり前から」

皆もここでわかった。だからこそその言葉だった。

「唯の可愛いところに」

「いいところにも」

「そういうことね。さて、それじゃあね」

一人が言った。

「私達にできることはね」

「何？」

「何かあるの？」

「見守りましょう」

微笑んで言った言葉だ。

「これからの二人の幸せをね」

手も握り合わずただ一緒にいるだけだった。だがそれで比呂は満足していたし唯も喜んでいる。そんな真面目なカップルを皆温かい目で見ていたのだった。

真面目は可愛い

完

2
0
1
0
·
2
·
1
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9619m/>

真面目は可愛い

2010年10月8日13時44分発行